

「東京新聞」の「平和の俳句」の4月掲載の句より。「桜咲く大戦をまだ償へず 伊藤 斎(76歳)」<いとうせいこう 「桜の向こうに累々たる死者、御霊(みたま)」を見る作者。戦争美化のために使われた樹木、その花は償えない。私たち人間がそれをするのだ。> 桜の花の散りぎわのよさになぞらえ、兵士たちに潔く死んで、靖国神社の桜の下に「英霊」として集まろうと諭した。無残に死んでいった兵士たちの死を償えるのは私たちが平和を作ることではないか。

「われの非をなじりし人の幸祈る 大平京子(74歳)」<いとうせいこう これが理性というものだ。そして慈悲、反省、前進を生み出す。われの非をなじった人をなじれば、いつまでも非は拡大する。> 主イエスは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われた。大平氏も同じ思いをもっておられるのではないか。非難する人の幸を祈れなくとも、違う意見の人の言葉を聞く耳を持ちたいものである。

「口先で銃禍打ち消す寒い朝 沖野竜太(りょうた)(48歳)」<いとうせいこう 戦闘があったかなかったか、報告をもみ消してしまうシベリアンコントロールの恐ろしさ。かえって文民が罪の意識を理解しない。> 南スーダンで起こっている戦闘を衝突と言い換え、派遣されている自衛隊員は安全だと言い張る。戦闘があり危険になったので、自衛隊員を帰国させることに変更した。一日も早く帰国させるべきである。教育勅語を礼賛する稲田朋美防衛大臣は時代錯誤な歴史認識をしている。防衛大臣を務める人ではない。

「平和の俳句 戦後72年」 「『琉球新報』から『平和のうた』」より。「勾留の君の隣にいる二月 高田留美(49歳)」沖縄平和運動センター議長の山城博治氏は高江のヘリパッド建設反対の抗議活動中に逮捕され、家族の面接も許されず、5ヶ月間も勾留された。高田氏は京都に住んでおられるが、遠くにいても「君の隣にいる」と詠っている。連帯などと言わずとも、共にいることを山城氏はどれほど嬉しく励まされたであろうか。

「逝った春被爆二世の友忍ぶ 川本一雄(61歳)」川本氏は高校生の時、同級生を白血病で失った。桜が散る季節に弔辞を読んだ。以来、春を許せないという気持ちであると言う。私の友人の奥さんは、広島で被爆した。母親におんぶされ、二人の姉たちは母親の両手に引かれて逃げた。三姉妹は皆、同じ病気で召され、原爆死没者名簿に記載されている。原爆で脅し合う権力者たちの傲慢と無知に耐え難い怒りを覚える。

「真実を凌(しの)ぐ虚構や春寒し 山口信雄(83歳)」 「ポスト真実」という言葉が流行っている。安倍晋三首相のデタラメな言葉、閣僚たちの無神経な言葉が続いている。嘘の上で行う政治は深いニヒリズムを醸成する。国民は目覚める時ではないか。

「春風や壁より窓を求めおり 岩辺泰史(73歳)」米国はメキシコ国境に壁を作ると息巻いている。ソ連は西側への逃亡を阻止するための壁を作った。イスラエルはパレスチナ居住地区とを隔てる壁を作った。壁を作った方が負けである。春風を通す窓を作った方が、歴史的には必ず勝利する。壁ではなく、橋を架け、風通りのいい窓を作ろう。

「傷病死哀れ五万余凍土(いてつち)に 大寫一也(87歳)」60万人がシベリヤに抑留され、1割の人が飢えと寒さで命を落とした。抑留者から聞いた話である。20歳ほどの若さで部隊の責任を負わされた。食料を公平に分け合うことを条件に引き受けた。上官からは嫌われたが、部下からは慕われた。お陰で一人の死者も出さず、帰国できたという。分け合えば、互いの命を保てるのである。